

125
ANNIVERSARY



同志社創立125周年 記念シンポジウム

東京

The Doshisha 125th Anniversary Symposium

共生への志

—心のいやし、
魂の鎮めの時代に向けて—

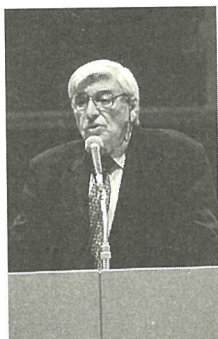
2000年11月11日(土)
東京国際フォーラム

科学技術の進展と物質的繁栄の反面、貧富の格差が増大し、戦争・殺戮が繰り返された二十世紀を経て、いま求められているのは、「心」と「魂」を見つめ直すことによる新たな宇宙観の獲得と、あらゆる多様性の望ましい共生を実現するための理念と方法である。共に学び・共に生き・共に創る二十一世紀の「志」へ向けて、有意義な一歩となることを願い、シンポジウムが開催された。

「共生の場」としての日本
は可能か

ロナルド・ドーア

Ronald P. Dore



ロンドン大学名誉教授。一九二五年英国ボーナムス生まれ。第二次大戦中、軍で日本語を学ぶ。ロンドン大学で日本の農村社会に関する研究を始め、一九五〇年、江戸時代の教育を研究するため東京大学に留学。以来、英国における代表的な日本研究家、知日家知識人として日英両国で活躍。著書は『江戸時代の教育』『都市の日本人』ほか多数。

百二十五年前に新島襄がアメリカから帰って来て同志社を創立したことを記念しているこのシンポジウムに招待していただいて、非常に光栄に存じております。私は主題を見て、また新島の経歴を見て、非常に考えさせられるところが多かった。いまでもアメリカから帰って来る人は、自己責任を重んじるとか、個性の尊重とか、そういうのはやりの言葉をよく使います。日本人がみんな起業心を起こして、リスクを負うような日本人にならなければ、この世界のメガコンペティションに生き残ることができないとか、そういうことをよく聞きます。こうしたアメリカ輸入の個人主義は、やはり「富国強兵」の延長上にあつて、「国のためにみん

記念シンポジウム

な自己責任を悟らなければならない」というようなことばかりですが、新島の場合は、むしろ倫理的な、道義的な目的で自己の確立を話していたのではないかと思います。

英学校を大学に格上げしようとしている時の趣意書の中に、こういう言葉が書いてあります。どういう人をつくるかというと、「独自一己の見識を備える人。自ら自己の手腕を労する人。自己の運命を作為する人を養う」ことによって、「教育あり、知識あり、そして品行がある」国民をつくらうとした。

新島の時には、ヨーロッパでも、アメリカでも、そして日本でも、哲学的思想の有力な一つは社会進化論だった。進歩という概念が基本的な概念だったのです。新島さんの弟子であった徳富蘇峰などが、イギリスのスペンサーの『社会進化論』などに影響されて、進歩主義の輸入に大きな役割を果たした。

人間が進歩することによってできることの一つは、いろいろな異民族、異質な人間の共生だった。つまり、内と外、あるいは我々と向こう、同胞と異人、そう

いう区別を意識しながら、しかし隣合って共生するには何の障害ともならない社会を理想的な進化の産物だと考えていました。

私が社会学を勉強し始めた時―それは第二次世界大戦のすぐあとだったのですが―あの世界大戦の無残な状態を見て、誰が人類が進歩していると言えるのかという考え方が有力でした。社会進化論は若い人たちの間で、とるに足らないものだという気運になったのです。しかし、私はそれでもやはり人間は進歩しているだと、心の中でずっと信じてきた。実は、そのあらわれとして、私は八年前に、日本のこと、日本のこれからの世界における役割について一冊の本を書いていました。その時私は、石原慎太郎さんの『N O』と言える日本』に對抗して、『こうしよう』と言える日本』という本を書きました。

ところがその後、世の中の情勢が変わりました。ソマリアの平和維持活動は全く崩壊し、続いてルワンダにおける民族殺戮に対しても国連は全然手を出せなかった。東ティモールでも、国連はほとんど

ど全く無能だった。元ユーゴスラビアにおけるボスニア人、セルビア人、クロアチア人の内戦に対しても、国連は結局役割を果たせなかった。そして、アメリカもしだいに一方主義的な外交にしか訴えなくなり、国連の存在が過去八年の間にずっと小さくなってしまった。悲しい世の中になってしまいました。いまになって、八年前の私がどんなにナイーブであったかと反省することが多いのです。

今朝（二〇〇〇年一月一日）の新聞、ラジオ、テレビを見ても、スペインにおけるバスクの民族衝突ですでに八十六人が死んでいると報じられ、中東ではパレスチナ人、イスラエル人の殺し合いが相変わらず続いています。八年前の私のナイーブな楽観主義の一つの要素は、ノルウェーの外交官の仲介によって、やっとイスラエルとパレスチナ人との間のいわゆるピース・プレゼンスが実現したことだったのです。それも最近崩壊して、血にまみれた、戦闘状態になりました。結局ユーゴスラビアは解体して、ロシアも解体して、ヨーロッパ共同体がどれだけ共同体になれるか、これも疑問です。

民族独立、民族国家、民族の自決を主張する勢力は依然として強いものであつて、世界の至るところでトラブルを起しています。

それでは、日本の国内での人間と人間との共生については、どうでしょうか。

日本人は同質的な国民であると思われれます。相対的に言えば、そうだと思うのですが、しかしその同質性は時代の移り変わりによって、かなり変わつてきているのではないか。明治維新の頃、薩摩の農民と青森の農民がもし会う機会があったとしても、ほとんど言葉が通じなかつたろうと思います。いまはみんなが標準語で喋れるようになって、同じ日本語のテレビを見えています。

しかし、その逆の傾向もありました。

当時、日本人の九〇%ぐらいは農民であつて、生活の仕方、技術、あるいは年中行事、宗教心は、同じようなものでした。そういう意味できわめて同質的だったのです。しかし、その後社会が発達して、工業化して、職業分化、階級分化が進んできた。そこで文部省は、二十年前に「よき日本人」の姿を描くような白書を出し

たのです。いまでは文部省は「よき日本人」などということはいわずに、価値の多様化とか、個性を重んじるような白書ばかりを出しています。

この間、通産省の『二十一世紀のビジョン』を読んだのですが、その中で、「創造的にレント創出を行う企業、技術が恒常的になされる新陳代謝の盛んな経済社会をつくることが急務である」と言っています。昔の日本は、やはり心をいやす日本だつたと思います。ところが将来の日本は、通産省に言わせれば、起業家精神を最大に発揮させる日本となる。つまり、いままでのもちつもたれつの社会が、「我先に」という競争的創造の社会にならなければならぬ。そうかな。私はちよつと疑問に思います。

通産省のビジョンが実現すれば、「個々の多様な価値観、希望、適性、能力に応じて、参画による充足感を与える」日本になると通産省は言います。理想としては、それは非常にけつこうなのですが、我々が持っているような高度技術の社会においては、その実現——つまりみんなの参画をはかること——はきわめて難しい理

想だと思っています。なぜかというところ、高度な技術を習得する能力は、人によってバラツキが大きいからです。伝統的な農村社会の技術水準だつたら、生計をたてるのに必要な知識というのは、親から伝わってきた知識であつて、ほとんど誰でも習得できる知識でした。学校に行くようになったら、読み書き算盤で事足りた。よくできる百姓と下手な百姓の収穫の違いは、ほんのわずかなものであつた。ところがいまは、成績がよくて、一流大学で電子工学士となるようなよくできる人と、勉強が嫌いになつて成績が芳しくなくて高校を中退して運がよければ定職にありつけるような人とは、労働市場における稀少性は大きく異なっている。そして、稀少性が違うことによって、彼らがつ持っているライフチャンス（機会）、収入、そして生活水準も大いになつてくる。「参画による充足感」は同じであるでしようか。

アメリカのような人が頻繁に転職しているところでは、貧富の差が拡大する傾向があります。いままでの日本は、わり

記念シンポジウム

ところが、いまの世の中では、年功序列的な共同体的な企業はもう時代遅れであって、誰もが能力主義に変えなければならないと言うのです。

企業のレベルでお話ししたことは、国家のレベルでも言えます。いままでなりに平等な社会であった日本で、あまり貧富の差が大きくなならないような、もう一つの重要な仕組みは公的年金でした。ところが、いま多くの専門家や金融学者が目ざしている年金改革案によると、国民みんなが市民権としてもらうような公的年金はだんだんと削られて、確定拠出型年金と称して一人一人が掛金を積んで、一人一人が口座を持って、どれだけ株式に投資するか、どれだけ国債に投資するか、市場のなりゆきによって給付をもらうような制度に移ろうとしています。給料の高い人はたくさん年金がもらえるようになって、貧乏な人はだんだんと削られていく公的年金しかないことになりま

す。日本は日本人が共生する国ではなく、同じ東京でも場所によっては、ますます別な世界になるような日本になるのではないかと思います。

「構造的貧困と豊かなる精神」

プラティープ・ウンスンタム・秦

Prateep Ungsongtham-Hata



タイ上院議員。一九五二年、バンコク・クロンタイ地区のスラムに生まれる。小学校卒業後、花火工場や外国船の錯落として生計を立てながら、夜間中学・高校で学ぶ。「教育こそが生活を大きく変える原動力になりうる」と考え、十六歳から学校へ行けない子どもたちのために「一日一バツ学校」を設立。これらの活動により、アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受賞、その賞金で「ドゥアン・プラティープ財団」を設立。教育・啓蒙活動など幅広く社会活動を展開する。

さて、まずは私の自己紹介を簡単にさせていただきます。

私は、タイで最大のスラム（貧困居住地区）「クロンタイ」で生まれました。スラムというと、タイ人の誰もが「劣悪な場所」として近寄りたがらないところですが、低賃金労働者たちが互いに助け合

って生活しているところで、政府からは必要最低限のサービスも充分になく、教育を受けられない子どもたちもおおぜい住んでいます。しかし、スラムの低賃金労働者たちが、いかにこれまでにタイ経済の発展を支え、他国との競争に打ち勝つために貢献してきたかについては、疑う余地の無いところです。スラムで貧しい人々とこれまで共に生活してきたことで、私は自分が何のために生まれ、彼らのためにいったい何をなすべきかについて考えさせられました。

私は十一歳の時、小学校四年で学業を断念して工場に働きに行かなければならませんでした。朝早く起きてご飯を炊き、弁当を自分でこしらえて持参して行きました。工場に行く時は、今まで通学していたのと同じ道を通らなければならなかったもので、かたやかつての学友たちは通学カバンを手に持ってまぶしいばかりの制服を着て学校に通い、一方の私は昼の弁当を持って工場に行くという対照的な生活でした。その当時、誰一人として私たちのことを援助してくれなかったことがとても悔しくなりませんでした。で

も、工場へ行つて見ると、私と同じ年か十歳にも満たない子どもたちがおおぜいいて、ほとんど学校に行つたことがなく、読み書きができない子ばかりでした。同じようにこの世に生まれてきたのに、どうして全く教育を受けられないのだろうかと可哀想に思い、その原因はいつたいどこにあるのか考えるようになりまして。

法律にしても、すべてが権力者に有利なように、まるで貧しい人々に機会を与えたくないかのように、社会を築いていくとする人が多いことに気づき始めたのです。貧困問題とは、道徳や倫理に欠け、権力者側に有利なように動く社会の構造にあると私は思います。

私は、現実にあるこのような貧困から逃れるため、どうすれば良いかを考え始めていました。そして、もし私にこれまでに以上の教育を受ける機会が与えられたとするならば、よい給料を得ることもできるし、よい仕事に就くこともできると思います、夜学に通うようになりました。

ちょうどその頃、近所の人が日中働きに行くのに子どもの面倒を見てほしいと

やつてきました。当時十六歳だった私は、姉と一緒に「一日一バーツ」学校と名付けられた自宅の軒下の小さなスペースを利用し、五、六人の子どもたちを預かるようになりました。預かった子どもたちには、お兄さんやお姉さんたちが付き添っていました。でも、聞くところによると、もう学校に行つてもいいような子どもたちばかりなのに全く学校に通っていません。出生証明書がなく、戸籍（タイでは住宅登録）にも名前がない状態で、小学校すら就学できないのです。

私と姉は、こうした子どもたちを同じ軒下で指導していくようになりました。出生証明書がなければタイ国民とは認めてもらえず、たとえ両親がタイ人であってもその子には何のチャンスもないのです。義務教育であるはずの小学校への入学すら認めようとはしませんでした。私はこれが貧しい人の現実なのだと改めて痛感しましたが、たらい回しにされたあげく、誰一人として解決しようとしないうちに彼らに怒りさえ感じました。この時、私は子どもたちが同じタイ人として平等に教育の機会を与えられるよう、たとえば

んなに時間がかかっても闘うことを決心しました。

寺子屋を始めてから十年後の一九七八年、幸運にも私はフィリピンにあるラモン・マグサイサイ財団より公共福祉部門においてマグサイサイ賞を受賞し、その賞金二万米ドルを基金にドゥアン・プラティーブ（希望のともしび）財団を設立しました。この財団は、タイ社会の中で、貧しい人々自身が設立した初めての団体となり、タイでは違法である共産主義者と疑われていた私や住民たちのイメージを一新することになりました。なぜならその時代というのは、一九七三年に軍事政権に対する学生運動が活発化し、三年後の一九七六年にはタマサート大学で学生たちを標的にした集団虐殺事件などがおこり、学生たちはジャングルに逃亡していたころでした。しかし、一九七九年、政府側は学生たちに処罰を与えないという条件でジャングルから呼び戻し、運動家たちは社会復帰をしていきました。このような歴史を経て、ドゥアン・プラティーブ財団の活動は、他のスラムのさまざまな貧困問題解決のために広が

記念シンポジウム

っていきました。財団の活動は、それぞ
れのスラム地域にある住民組織が結
束し、自分たちの問題は自分たちで解決で
きるよう側面から支援していくというも
ので、政府機関や他の民間団体（NGO）
との連携を促していきました。

ここで、今日のタイ社会の構造的貧困
についてさらに話を進めたいのですが、
第一に経済危機の問題があげられます。
第二の原因は、経済危機に関連した負債
の問題です。現在、タイは先進諸国や国
際機関に対して約三兆四千億バーツ（一
バーツ約二・八円）の負債を抱えていま
す。第三は、環境破壊の問題です。タイ
国土の森林面積は二〇％以下となり、貴
重ですみきった水も豊かな河の流れもど
こかへと消えてしまい、運河の水は悪臭
を放つといったように、環境が破壊され
てきました。第四は、不正や汚職の問題
です。第五に、タイ人たちが卑劣なこと
に対して無関心であるということが挙げ
られます。

こうした今日のタイ社会で、貧困とは
何ですかと聞かれたら、当たり前のこと
かもしれませんが私はこう答えるでしょ

う。「貧困とは、物質的にも精神的にも欠
乏している状態である」と。

最近では、麻薬などの問題に陥った少
年たちのための「生き直しの学校」に続
いて、映画「戦場にかける橋」で有名な
カンチャナブリというところにも、つま
ずいた少女たちを受け入れるための「生
き直しの学校」を開設しました。そこで
受け入れている子どもたちのケースは、
タイ社会の最も歪んだ部分を反映してお
り、あつてはならない信じられないほど
ひどい問題をそれぞれの子どもたちが抱えて
います。

親の愛情に欠乏した子どもたちは、感
情的にも知的にも通常より発育が遅れて
しまいます。たとえば、六歳から七歳ぐ
らいで性的虐待を何回も受けた子などは、
まともに歩けないような状態になっ
ていたり、顔を向けても言葉が出なくな
っていたり、誰一人として信じられなくな
っていたりします。また、別の女の子
は、母親が麻薬中毒に陥って首吊り自殺
をはかり、父親は刑務所に服役中でおば
あさんに預けられていたのですが、万引
きが癖になっていつも食べ物盗んでし

まいます。性格もあれば、喧嘩も絶え
ないといった具合です。彼女たちには
決して罪はないと思うのですが、これも
貧困の悪循環を生み出す構造的な原因の
一つといえます。

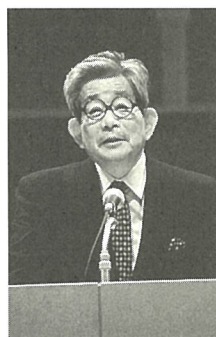
でもこうした子どもたちに、日本をは
じめ世界各地から手を差し伸べ、何とか
して彼らと共に生きたいと思ってくださ
る人たちがたくさんいることも決して忘
れてはなりません。こうした人々は、ほ
どほどの食事をし、ほどほどの暮らしを
して、決して贅沢ばかりしようとはせず、
他人のことを大切にして社会に還元して
いこうとしています。

私も小さいときから母にいつも言われ
続けてきた言葉を思い出します。

「他人に尽くせば尽くすほど、それは必
ず自分に返ってくる。だから決して、独
り善がりの人間になってはいけない。た
とえ貧しくても、自分に自信と誇りをも
って強く生きていきなさい」と。

「道徳的な態度とよく考え
る態度」

大江 健三郎



作家。一九三五年、愛媛県生まれ。戦中の山村で幼年、少年期を過ごし、敗戦後の民主主義に目ざめをあたえられたことが、文学の基軸をなす。東京大学フランス文学科に学び、在学中に芥川賞を受賞。長男光さんが障害をもつて生まれたこと、ヒロシマで被爆者に出会ったことが、その後の文学生活に重い意味をもたらす。一九九四年、ノーベル文学賞を受賞。

ひとりで講演をしますより、このようにシンポジウムに入れていただきますのが、私にとってずっとありがたいことです。ずっと困難なことでもあります。つまり、本当の勉強になるということです。特に、いつも新しい覚悟を決めなければなりません。その証拠に、いまお話を伺いながら自分で誓ったといえますか、自分でこうしようと思ったことを申してお

きたいと思います。そういうながら自分が誓い通りにやれるかどうかは心配なのでありますが……つまりそこは小説家のどうにも怪しいところです。

しかし、いま私はドーア先生に対しては、こう申したい。世界の中の日本人として嘘はいわない。プラティープさんに対しては、アジアの中の日本人として嘘はいわない。それから同志社大学の創立者、新島襄に対しては、百二十五年後の日本人として嘘はいわないでお話したい、と申しあげて始めます。

私は小説を書く人間です。広く言えば文学側の人間です。そのような人間の仕事の特徴は、そのまま弱点でもありますけれども、想像力を基盤に置いて考えるということだと思っています。そして、人間の想像力が最もよく働くのは「初めと終わり」においてだと、私は思っています。近代の日本という国、日本人ということを考えて、想像力というもののが最も活発に働いた時期を選ぶとしますと、まず、司馬遼太郎さんをはじめ、多くの文学者たちが書いてきたことでありますけれども、明治維新前後の、つまり我々の近代

化が始まった時だったと思います。そして、その近代化がどのような破局を迎えたかということを考えるための指標になりますけれども、日中戦争の始まりから沖繩戦、そして原爆投下に至る太平洋戦争の終わりに向けての時期だと私は思います。あの時期にも日本人の想像力は働いたのです。しかし、太平洋戦争の終わりに向けてということは、見方によっては、終わりではなくて、本当の終わりの始まりであって、私たちはさらに大きいカストロフィーに向かっていくのかもしれない。日本の近代化の行き着くところ、あまり遠くない将来を、非常に暗いものとして覚悟しなくてはならないのかもしれません。むしろ、そういうことがないようにという努力、そういうことがないようにという想像力的な努力の一つとして、このシンポジウムは開かれているのではないでしようか。しかし、話をあまり先走りさせないことにします。先走り過ぎるというのも、文学の側の人間の、これは弱点ということがはつきりしている特質の一つです。

きょう現在の日本の状況、世界の状況

記念シンポジウム

につないで考える時、その意味をはっきりさせてくれる、さらに切実なことを考えさせてくれる、そのような働きをする論文を一つ読みました。ノーベル経済学賞をお受けになったアマーティア・センという学者がケンブリッジにいられますが、この夏のバグウォッシュ会議がその大学で開かれました。その時にセンさんが講演をなさった、その中から引用したいと思うのです。

セン教授は、ラビン・ドラナス・タゴールというインドの大詩人の言葉をまず引用していられます。「軍勢力を熱心に求めるあまり、国家がその魂を犠牲にして、その兵器を増大させるならば、敵国よりも、その国こそが大きな危険に陥ることになる」というものです。これは、日本と日本人に好意を抱いていた大詩人タゴールが、そのうち日本が経済と社会の発展を軍事化に切り換えて行った、その状況を憂慮して行った発言だということです。ここで使われています「魂(ソウル)」という言葉は、タゴールにとってとくに「人間性」ということを意味します。それから国際関係での理解ということも含ん

でいるということです。そのようにアマーティア・センさんは説明していられます。国際関係での理解ということ、自国の人間の魂がどう理解されるかということと並べて考える態度を、私は貴重だと思います。新島襄の演説草稿にも、倫理と知恵の両側面、道徳と知識を両立させようといった演説に続いて、国際関係というものがどんなに日本人にとって重要かということが出てくるのです。その点にも注意をしていただきたいと思います。

セン教授は、続けてこういいます。「タゴールが日本の軍事的敗北と原爆の惨害を見ることはなかった」と、そういつてから自分自身の主題に入って行かれるのです。それはインド亜大陸の二国の核武装が、近い将来、二国にとってどういう進み行きをもたらすかという、パキスタンとインドの核状況についての考察です。セン教授はそのことを見ながら、まず、道徳的な態度、それからよく考える態度というものを対比してゆかれるのです。いま私が「道徳的な態度」といいましたのは、原文では「the moral」です。

それからもう一つ、私が「よく考える態度」と訳したのは、「the prudential」です。この二つの側面から見て、インド亜大陸の二国の核武装にはどういう意味があるだろうかということを、彼は検討します。そして、いまの問題をインド一国の側から見て、the moral―道徳的な点で正しいとは言えないということは明らかである。しかし the prudential の点でも賢明だろうか、というわけです。

この夏、私は小澤征爾さんと数日続けて話しあいました。彼は近代化以後日本に入ってきた西洋音楽というものが、いまなお東京でのコンサートでは、国の内外の演奏家によってはつきり二つに分かれたダブルスタンダードで行われている、ということを残念がるわけです。外国の演奏家は五万円のオペラ、日本の演奏家は二千万円というようなことではない。こういうダブルスタンダードがある、これを改革したい、と考えているのです。そして、その方向へ若い人たちに教育したいということをいつています。そして現にそれを進めています。私は彼のやっている、そのための合宿に行

ったわけですから。

日本の近代化は、タゴールも評価しましたように、アジア諸国に先行しました。しかし、いまなお音楽においてそうであるように、様々なダブルスタンダードというものを西欧あるいはアメリカと日本の間に残しています。経済繁栄の時期にはほぼ覆い隠されるようであった、生活水準においてのダブルスタンダードということも、バブルの崩壊とともに多面的に露呈してきたと思います。小澤さんは、日本人の聴衆、演奏家、そして批評家までが、音楽においてダブルスタンダードを意識して許している。日本人のメンタリティとして、音楽のみならず、もつと底の深いものとして、西欧、アメリカとの間にダブルスタンダード的なものを許す精神傾向があると私は思うのです。

その最も深刻なものが、日米安保条約と核兵器の日本への一特に沖縄です。持ち込みということにあらわれていると思います。日本の政府が核の状況について、その現状と将来について、広島と長崎の経験ということを裏切らない、すなわち the moral にかなっている、しかも日本

人の将来のために有効である、prudent、たゞでもある態度を表明したことが、いままでは私は二度あったと思います。その一つは、一九六七年に首相が明確化した非核三原則です。「核兵器を持たない、つくらない、持ち込ませない」というものです。ところが今年明らかとなった米国務省文書の一つを見ますと、それ以前に首相・佐藤首相ですーが、核搭載の有無を問わずにアメリカの海軍艦船が日本に入ってくることを認める、日本との協議なしに寄港できるという合意に達していたということを示しています。つまり、当時画期的に思われた「非核三原則」の宣言というものは、当初から無意味だったわけです。ベトナム戦争時に、そこへの出撃基地、また核貯蔵基地として使われたのは、米軍政下の沖縄でした。それをへて、一九六九年の核抜き本土並の施政権返還ということが行われたのです。ところがその場合にも、「核抜き本土並」といってはいるけれど、有事の際には沖縄への核の再持ち込みが密約されていたと、当事者が証言しています。

これから問題なんですが、私はそれ

をいくらか時間的なズレはあれ、日本の市民はしだいに知ってきていたと思うのです。少なくとも色濃く、そういうことじゃないだろうかと感じ取っていたと、私は思います。すなわち、よく知りながらだまされたふりをしていたのが日本の市民だったのではないかと私は思うわけなのです。なぜそういうことになったか。まず核抜き本土並の沖縄返還ということにすれば、表向きは日本が米軍の核戦略に直接加担していないと言いはることができます。表向きモラルを傷つけずにいられるわけです。しかも、その裏側で米軍の「核の傘」の下にできる。それは本当に賢明だ、よく考える態度にかなっている、と考えていたのだと思います。「Prudential」という言葉に「打算的」という訳語をあてる字引もあります。この場合はそれが当たります。

そしていま、私がセン教授の講演に導かれて考えますのは、戦後半世紀をこえて日本政府と日本人が続けてきた、モラルと、よく考える態度への都合のよいダブルスタンダードがとうとう行き詰まってきた、ということなのです。

記念シンポジウム

広島、長崎につながる日本人のモラルは、もう十分に壊れていると私は思います。そして私がいいたいのは、それを再建できるかどうかということなのです。そして、この五十年、日本人がそう見なしてきた、よく考える態度というものが日本人の将来にかけての選択として、本当にブルデンシャルであるかということに再考しようじゃないかといいたいです。すでに、これら二つの問題点については、それぞれ確実な展望を築いて実践を始めている市民たちがいます。それは広島にいます。長崎にいます。そして、沖繩に明らかにいます。

私たちがすべきことは、「君たちがモラルについて考えないということがわかった。恥知らずなほど鈍感であることはよくわかった」ということです。そして、「その鈍感さをリアリストのものだと自認する君たちは、自分たちが鈍感であることを誇りにすらしているだろう。しかし自分たちは違う」とはっきり示すことだと思えます。そして、そういう連中が自信をもっている現実的な態度というのは、本当に彼らが思っているほどよく

考える態度であるだろうか、ブルデンシャルであろうか、と問うことが必要なのです。

共生への志は、日本という国の中で日本人の共生ということでもあるに違いありませんが、むしろ国家の境界を越えての、アジアでの共生ということが主眼をなすだろうと思います。まずそれしなければ、日本人にとって、世界での共生ということもありえないことは、近代化の始まりから、一九四五年の敗戦という行き詰まりにいたるまで、非常に血なまぐさい経験を通じて私どもは学んでいます。さらに私は、自分の生きてきた経験として、明治維新から敗戦までの八十年間に対して、戦後の五十年数年間に、日本人が国内及び国際的に体験したこと、つまりは自分たちの選択として実現してきた国の進み行きということが、どうだったかということを重ねて感じています。それは私たちが、実現できたかもしれないのに、この五十年実現しなかった、その国の進み行きということを考えることでもあります。

日本の政府とアメリカ政府との間の密

約の数々が露骨に示しておりますけれども、超大国アメリカの世界戦略、アジア戦略のプログラムに日本は従ってきました。政府は抵抗なくそれを受け入れました。そして大方の国民は、米日安保に密約というものがあるということを知っていた。しかし、それを表面化させてしまえば、戦争直後の悲惨というものを経験し私たちがかちとったモラルの感覚が裏切られるということも知っていた。だから、それを表面化させない。そして、漠然とながら、よく考える態度として、こうした国の進み方がいいのだと、それを受け入れてきたと私は思います。

そして、冷戦の終結があった。朝鮮半島には新しい共生への動きが見えてきています。

現にわが国が頼りきっているアメリカの戦略の基盤、それを揺るがしかねないような危機が、沖繩の新しい米軍基地の建設をめぐる、すぐにも表面化するだろうと私は思います。それは直接にアメリカの核戦力自体が、その専門分野での用語法でいえばバルネラビリティをといいますが、弱いところを持つということ

を示すことになりかねません。辺野古という海辺の村に住民がつくった小屋があります。そこで小さな集会が行われているのですが、日本政府に対しても、アメリカ政府に対しても、どれだけその小さな小屋が強力な抵抗力をもつかということを、来年の前半のうちに世界全体が具体的に見ることになるだろうと思います。

私は、若い日本人たちに、この危機的な事態を、つまり日本の安保体制の大きい組み替えを余儀なくさせるような危機が沖縄から起こるということを、自分たちの問題として受け止めていただきたいと思っています。そして、国家の進み行きの選択について、モラルとブルデンシャル——道徳的な側面とよく考える態度というもの——を総合する仕方と考え直す、そういう力を準備していただきたいと思っています。それがなければ、この日本においてすら、たとえば沖縄の小さな漁村の住民たちと東京の若い人たちとの間の、共生の志というものは成り立つものではないと思います。アジアでの共生の志というのは、さらに限りなく遠いと、私は思

います。

一応の締めくくりに、改めて小説家という職業の人間の特徴を申し上げますと、小説家とは「未来の人間性」ということを考える職業だという、トーマスマンのいった言葉が正しいと思います。the moral（倫理的なもの）とthe prudential（よく考えた態度）、その二つを共に成立させることができる、そういう状態が「未来の人間性」の世界だと、私は想像しています。その点で小説家は楽観的なのです。

このシンポジウムの詳細は、岩波ブックレットNo.528『シンポジウム 共生への志——心のいやし、魂の鎮めの時代に向けて——』に収録されています。この三点の抄録は、岩波ブックレットから同志社時報編集委員会が作成しました。